

B
T
A
N
N
O
T
B









忘却少女



blancxnoir
双対の恋人



Momoko
Sakuyoi







BLANC X NOIR

目次

(執筆者敬称略)

✧カラーイラスト✧

- MIE … 3
- GULLIVER … 4, 5
- 忘却少女 … 6
- ミイケ … 7
- 桜井桃香 … 8
- にやめ … 9
- 紬 … 10

✧本文✧

- ぱにちよこ … 13
- JUSTICE … 21
- 手前豆腐 … 23
- にやめ … 29
- 清水紅葉 … 35
- 冷や熱うどん … 39
- うつきゆあ … 41
- MIE … 51
- 愛麗朱 … 54
- コウ0000 … 59
- Elia … 63

執筆者コメント … 69

奥付 … 74

表紙 by MIE

※当アンソロジーには成人向けの内容が含まれております。ご注意ください※

ここから
先は...

オトナの
シークレットサービス
が始まりますよ

成人向けの描写
がある！18歳未満
は購入・閲覧禁止
だ！！

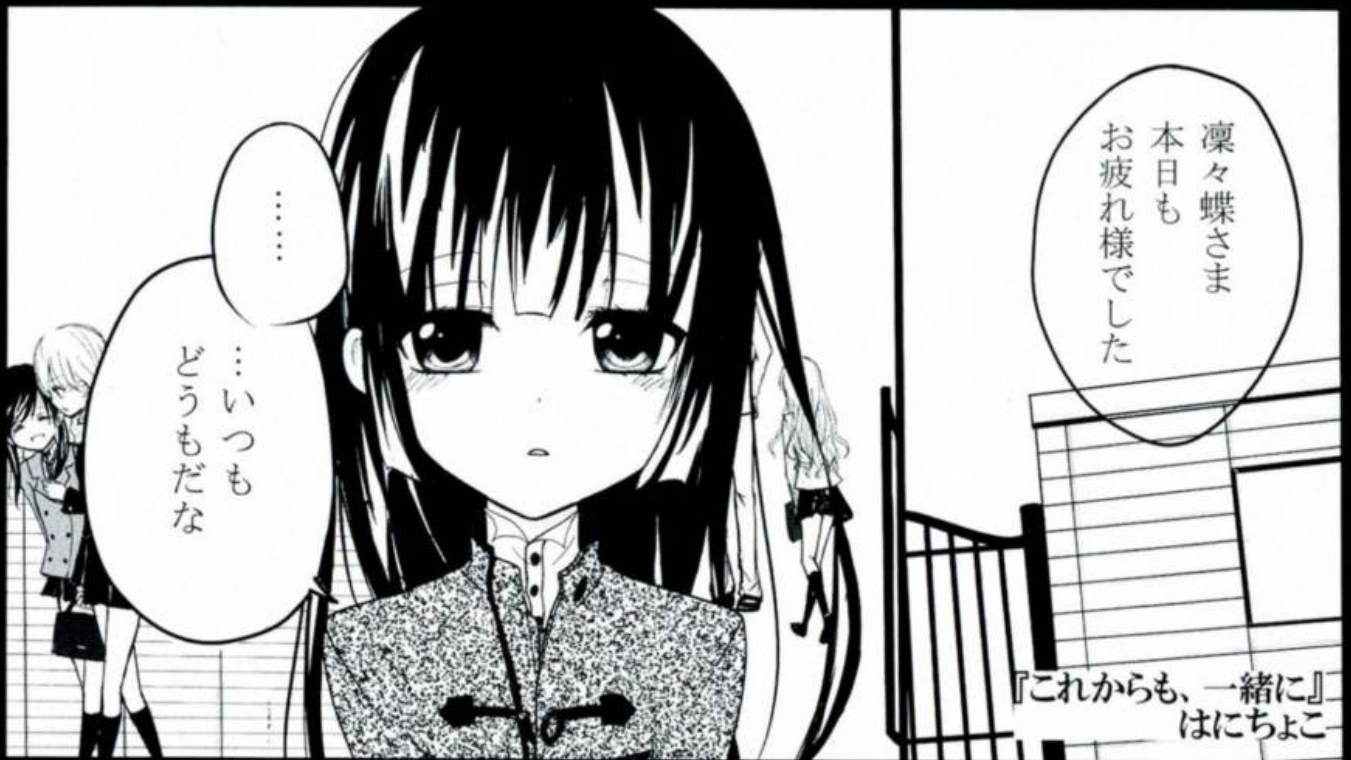
尻とくちまな
御狐神さん！

購入時には
年齢を確認
させてもらう！！



さわ
さわ
♡

👉 GO ON TO THE NEXT PAGE ☆



僕達が出会ってから、
もうすぐ3回目の春を迎えようとしている



その間、
僕達の関係も少しずつ変わっていった。

君もすっかり
読書が様になっ
たな

ふふ...

光栄です

ですが...
凪々蝶さまのお隣で
こうして一緒に
させていただくなど...

嬉しくて
バチが当たって
しまいそうです...

当たるか


それに...

それは


凪々蝶さまが
教えてくださった
ご本はどれも
面白いのでつい

ええ
先日 凪々蝶さまが
お話されていたのを
聴いて気になって...


その星の王子様は
ただ一輪咲いた
そのバラをとて
大事に世話していた



だが
嘘や気まぐればかりの
花を信じたことが
できなくなった王子は
ついに
その星を去ったんだ



…地球を訪れ
この世にたった一輪しかない
と思っていたバラの花が
ありふれているものだど知り
とてもショックを受ける



そうして
問われた

『あるものを他と違って
いとく思うことができるのはなぜなのか。』



同じ時間を重ねて
何かを与えたり
与えられたりと：
そのうちに 互いが
なくてはならない
存在になる

星に残してきた
あのバラこそが
代え難い特別な存在
だったと気付くんだ

児童文学
だな

なかなか興味深い
本だったとでも
言っておこうか

…はい

僕も
読みたいです

…僕にとっては何よりも
大切なものは
凛々蝶さまのお傍に
いられる時間ですから

その時 やっと
気付けたんだ

こんなに
遠回りして
しまった僕に
君は
呆れただろうか

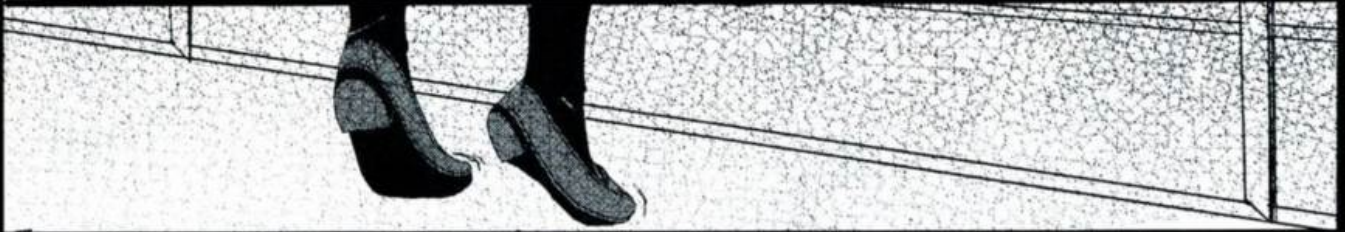
きっと

たくさん
傷付けてしまった



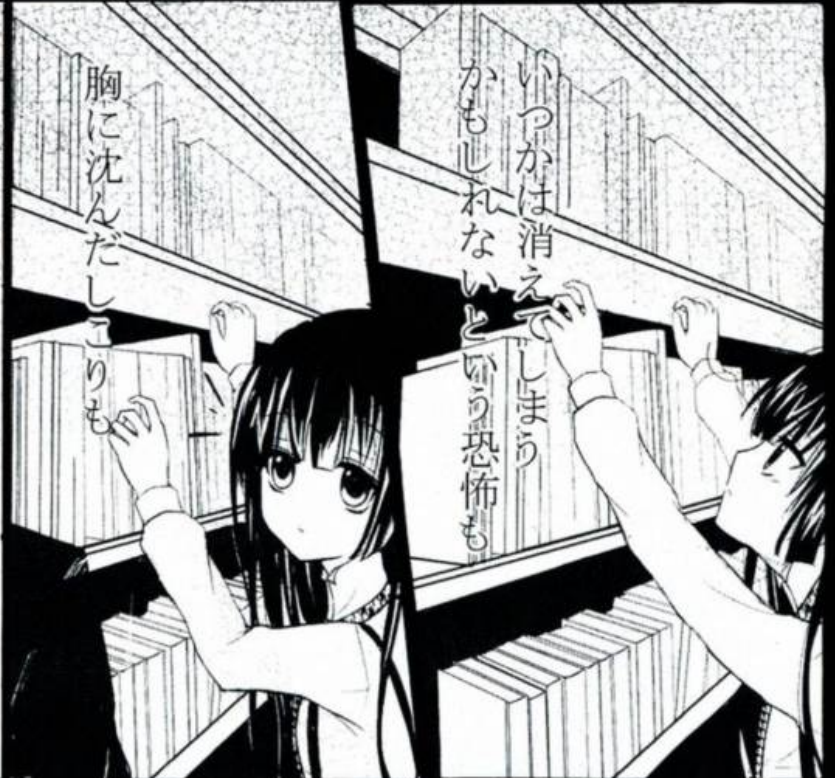
それでも
また 僕のSSとして

変わらずに
傍にいてくれた



いつかは消えてしまおう
かもしれないという恐怖も

胸に沈んだしこりも



君と過ごす
穏やかな時間に
浄化されたようで……



御狐神くん

聞いて
もらえる…？

ごめんね ずっと
待たせてしまって…

でも
ようやく辿りついた


僕は、

御狐神くん…

君を…
好きになっていた


僕の答えに…






御狐神くん
屈んで…？

凜々蝶
さま…？



君と一緒に
いるうちに…

…彼ではないのだと
やっぱり違う人なのだ
と何度も思った



君と過ごした
時間の数だけ
本当の君を知った、

…それが
嬉しくて…
違う所も嬉しくて…

いつの間にか
君との毎日が
こんなにも色濃くなつて

…っ
凜々蝶…さまっ

『大切なものは
目に見えない』

…うん

凜々蝶さま…！

それが
あの物語の要旨…

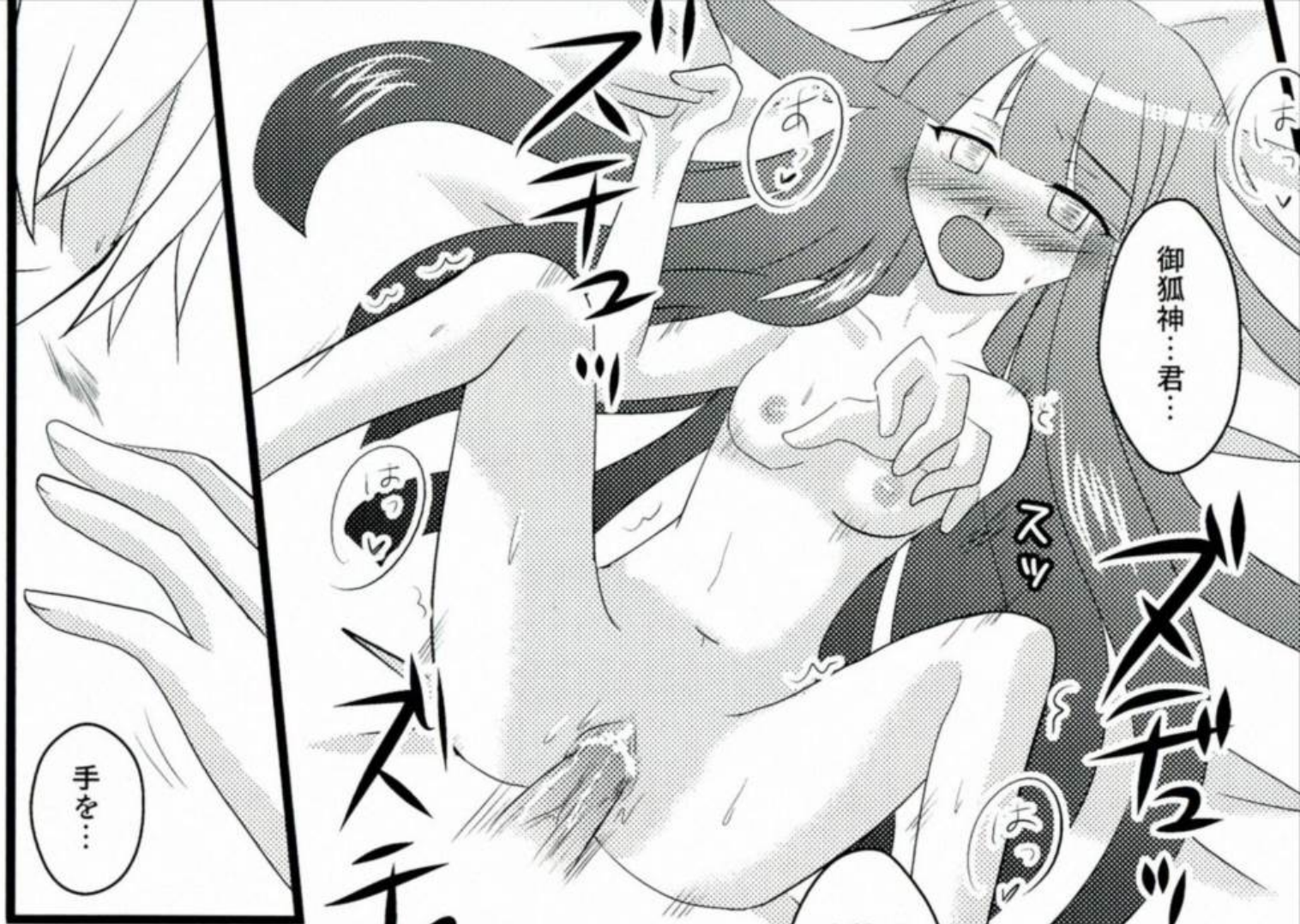
僕たちが背負ってきた
時間は 優しいもの
ばかりではないけれど

でも もう
手放したりしない

全てひっくるめて
それでも
歩いていけるのは

君との今が
とても温かくて
愛おしいからなんだ

君が好きだ。



御狐神…君…

手を…

手を
繋いでいて…
くれないか



凍々蝶様…

きゃん



お願いだ…

…はい…

部屋の中では
甘えてくる
そんなツンデシな
ご主人様が
僕は大好きです

きゃん

いつも僕の背にそっと添えられるだけの手が、今は、ぎゅっと力を込め握った指を、優しく割り開くようにして絡めとる。

——そんなに力を入れないで、僕に任せて下さい。

甘く囁かれた声がよくみかえるようで、僕は目を瞑った。だって、彼が微笑むから。

幸せそうな、どこか苦しそうな顔で、僕を見つめるから。

愛してます、と彼は囁く。

何度も、何度も。その甘い声が僕に注ぎこまれていく。

その度に、僕は、好きという感情と、彼の愛していると、という言葉の合間に揺れ動く。

だって。

僕は、恋も知らない。

恋とは、何だろう。

好きだけではないのは、わかってはいるのだけれど。

愛とは、何だろう。

彼は、僕を愛している。

それは、本当は、どういうことなのか、わかりたい。

恋もわからないのに。

愛を知るなんて、まだ遠いけれど。

Not enough 手前豆腐

指先までも、つま先までも甘く満たされた体をもてあまして、僕は、吐く度に熱の残滓を逃がそうとするような息をつきながら、互いに息を乱しあう彼の胸元に抱かれた。

こんなときに、言葉なんていらぬ。

ただ、何も考えられないほどに甘く痺れる感覚に身をゆだねるしかなくて、抗うこともできないまま、ただ僕は流される。

好きという気持ちだが、こんなに甘さを呼び起こすものなのか。

彼の顔が見たくてそっと上向くと、青緑と金の双眸が優しく、しかし見つめられればたじろいでしまうほどの熱さを湛えて僕を見つめ、そしてやわらかく僕の黒髪を撫で、一掬いし口づけて。

僕は、手探りで彼に触れる。腕をなぞり手にたどり着くと、そっと握りそして指を絡めた。

「凜々蝶さま」

呼びかけに、彼を見つめ瞬きで応えた。

「愛してます……」

胸に言葉が落ちる。

じわりと心に灯がともるような心持ちで、僕はそっと頷いて、目を伏せた。

愛して、います

そうして囁かれる彼の声をもし奪われたなら、僕は、相手を許すことが出来ないかもしれない。

失いたくない。

それは、好きというこの気持ち、好きだけではないというものであるけれど。

……これは、恋なのだろうか。

「御狐神くん……」

「はい」

「君と……その……」

「はい」

こうして過ごす時間を尊いと思うのは、

無くしたくないと思うのは……。

「これは、恋、なのだろうか」

彼は、少し驚いたような表情を一瞬だけ見せて、曖昧に

微笑んで。

そして僕の耳元に囁いた。

「これが恋だと申し上げたら、凜々蝶さまは可愛らしく僕の言を信じてくださるのでしょうか」

「……ぼ、僕が、言いたいのはそういうことじゃ……」

「どうか、この先も長く、いつまでもお側に」

「御狐神くん」

「……凜々蝶さま、恋、です。好きだけではなくて、独占したくて、失いたくなくて、尊いのです」

心の中を覗かれたかのようにだった。

驚く間もなく首筋にキスされて、きつく吸う感覚に思わず小さく声が漏れる。

「誰にも奪われたくない。しかし……」

抗議の声を上げようとした僕のくちびるを、彼は指一本で制して。

「誰からも隠して、守り通したい気持ちは、抑えております。……凜々蝶さまを愛していますので。」

……ですから凜々蝶さま、お気持ちを、嬉しく思います」

それは、恋です。

囁かれて、僕は頷いた。

彼が、また体のあちらこちらをなぞってくる。

冷めかけた熱が再びこもって、身をよじり次の一手を防ごうとするのに、彼は嬉しそうに微笑んで。

「凜々蝶さま、僕を独占してください。

……離さないで、抱き締めて、繋ぎとめてください……。僕はここにいます」

続きをしたいのは君の欲だろうと言いかけて、やめる。

そうだ、僕は彼に恋をしているのだ。

離さないで、抱き締めて、繋ぎとめなければ。

だって、目の前にいるのは、寂しがり屋の犬なのだから。

二度目の誘いにのるつもりなどなかったけれど、彼の熱を感じている時間はたまたまなく幸せだから。

悪戯な手を捕まえて、そっとその指先を甘噛みした。

彼が微笑む気配がして、僕はまた、彼の愛を身に受ける。

それも、自分の望んだことなのだ。

僕を愛して欲しいだなんて、口に出せるはずもない。

けれど、彼に触れていたいと思うのは。

触れた肌が、温かいと思うのは。

離れたくないと、思うのは。

僕は、恋しか知らない。

いつか、彼と一緒に愛を知ることになるだろう。

その答えは、急がなくてもいい。

いつも胸に当てている君の手は今、僕の手に触れている。手をつないで、指を絡めて、そしたらもっと近くなって。

君が、自分の心を覆い隠していた時間は過ぎて、今度は、

僕がその心に触れられたらいい。

僕が君を受け入れる。

君が、僕を、僕だけを僕として見てくれたように。

だから、君は、そんなに自分を嫌わなくていい。

君の過去が君を作ったなら、今僕の前で微笑んでいる

君は、過去の賜物だ。

それは恥ずべきことでもなんでもない筈なのだから。

何故、時折寂しい目をするのかなんて、僕は問わない。

君をありのまま受け入れたいから、躊躇いなどしなくて

いいと、僕は思う。

躊躇いも君の優しさだということは知っている。

優しい御狐神くん。

……でも僕は、そんなに弱くないから。

どうか心配しないで欲しい。

もつと、君の心が見たい。

そう願うのは、僕の我儘だろうか。

僅かに漏れる微かな呻きを申し訳なく思いながら、
主の言葉を思い出す。

「君が、自分を好きになれなくても、僕は……」

彼女は確かにそう言った。

今は、自らの熱に、与えた熱に、自分の昂ぶりに震えて、
潤んだ瞳で見つめてくる。

「みけつかみ、く……つん……」

呼びかけが漏れる吐息と共に吞まれ、彼女はぎゅ、と僕の腕を掴んで力を込めた。

硬い蕾を解きほぐすように、などという形容は無意味だ
と思う。

事実そうなのだとしても、彼女の苦痛が消えてなくなる
わけではない。

初めて程ではないにしろ、こらえながら浅く息を逃がす
姿に胸を痛める。

しかしながら、動きを止めれば首を振り、彼女は躊躇い
を許さない。

全てを受け入れると潤む瞳が告げているようで、愛おし
さに眩暈がする。

愛では足りない。

彼女への気持ちを表すのに、愛という言葉では到底足り
ない。

彼女のためなら何もいらぬ。

他に何を失っても後悔しないだろう、ただ、彼女を手に
入れられるなら。

精一杯に自分を受け入れようとする彼女を、失いたいな
どと思うはずもないのだけれど。

どうすれば、貴女の側に居続けることができますか。

どうすれば、貴女を失わずに済みますか。

答えのない問いを自嘲気味に笑って、熱に浮かされたよ
うにとろりとした視線を向ける彼女に少し意地悪く動いて
みせれば、堪えきれない声が漏れて、また愛おしさが募る。

「いじ、わる……!」

「はい。凛々蝶さまが、あまりに……」

……気持ち良さそうでしたので、つい」

嗜虐心をそそります、などと甘くかすれた声で囁いて、
自分の心を覆い隠してみせた。

「ふん、君の悪戯など他愛もな……っあ……や……」

角度を変えて、体勢を変え再び深く沈み込むと、彼女は

背を弓なりに反らすようにぴくりと跳ねた。

今度は辛辣な言葉など出ない。

浅い息を繰り返しながら、涙を浮かべてこちらを見返してくるばかりで、しかしながら、羞恥に染まる頬や耳が、朱を帯びるたびに彼女の高まりを感じて、嬉しくなる。

僕は許されている。

こんな僕でも、許してくれる存在がいる。

そのことが、どれだけ僕を救ってくれたのか。

……貴女は、知らないかもしれせん。

堪えていた声が漏れて、自らの声に更に羞恥を煽られて、嫌がるように首を振る彼女にそつと意地悪く囁いてみせる。

「嫌では、ないでしょう？」

泣きそうな顔で見返してくる彼女が愛おしくて、

髪を撫で、深く口づけてそれでも足りず強く抱いた。

愛してます……そう何度伝えても、足りそうにない。

愛、なんて一言などでは全て言い表すことなどできない。

凜々蝶さま。

貴女は、僕の全てです。

自由を手に入れるためだった。

そのためには、何でもしてきたのだ。

けれど、そんな僕ですら、彼女は無垢な心で、そして、無垢な身体で、全て受け入れようとする。

汗で張り付いた前髪をそつと整え、額に口づけを落とす。僕が望めば、無茶にも応えようとする。

華奢な身体に無茶を強いるとわかっていても、時に飢え、僕は何度となく唆し、そしてこの手に彼女を閉じ込めた。

しかし彼女が満たしてくれるのは、僕ごときが抱く愚かな劣情だけではなくて。

愛してますと呟いて、こみ上げる愛しさに視界が潤む。

いつの間にか二人だけの夜は過ぎ、明ける夜を静かに、不思議と満たされた気持ちで迎える。

夜明けが憂鬱でなくなったのは、いつからなのだろう。冷たい思い出は去り、朝が花開く。

光にあふれる世界を、どうか二人で歩んでいきたい。

今は、強く……強く、そう思う。





ふわふわもふもふ

にやめ

もふもふ

御狐神くんの尻尾は
触り心地がいいな！

このモフリ具合が
なんとも！！

恐れ入ります。







ボっくは

モフモフしたいんだ！
だからこっちでいい



そうですか…
そんなに…では

尻尾でお相手させて
頂きますね

これ

これ？

は
?!



たかたかた

わっ

え?!

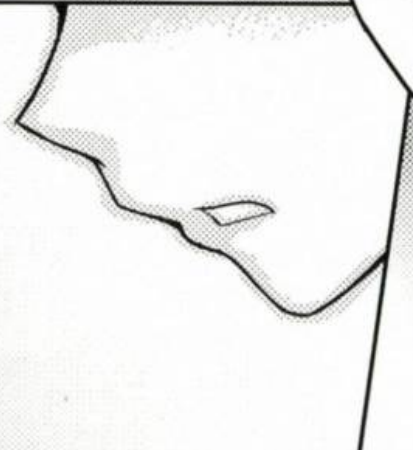
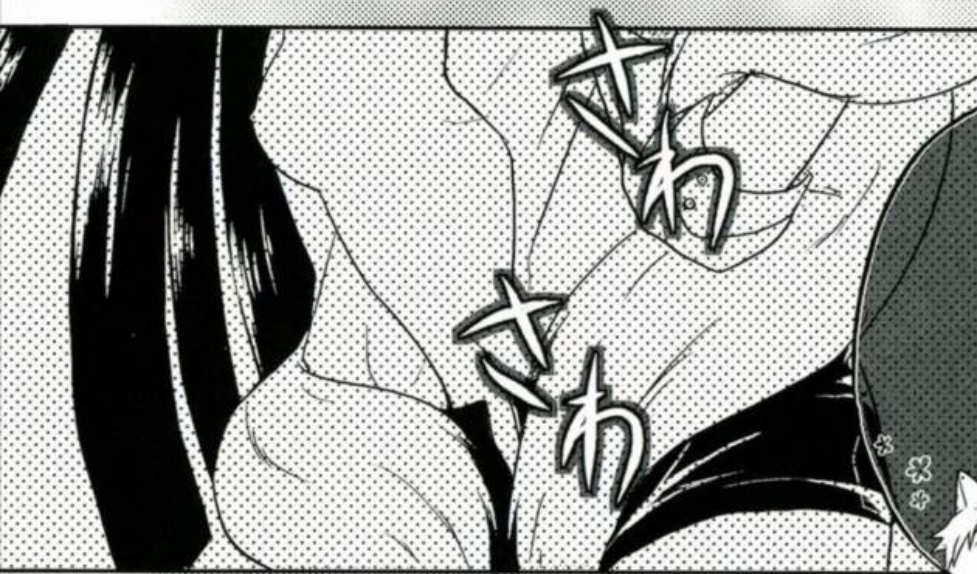
ビクッ
ビクッ
ビクッ

コラ!!

御狐神くんっ
何なんだこれはっ

…何って。

御気に召した御様子
なのでもっとモフって
頂こうと思ひまして☆



ニヤニヤしてるわね

もうこれ以上は無理です!!
我慢の限界なんです!!

(尻尾から伝わる貴女様の暖かな温もりと
柔らかな肌の感触を堪能しておりますが)

尻尾ではなくこの手で抱き締め
たいという気持ちの限界です…

かきおまぬ

ひゃんっ

…おれん



なので。

今度はこちらの
番と言う事で



凜々蝶さまを
モフモフさせて
頂きますね☆



モフモフ…

もいもい
させて頂きま

申

願いは、ただ一つ



清水紅葉

それは反ノ塚が突然言い出した事だった。タイムカプセルを埋めた日からもうすぐ一ヶ月が経とうとしている時に、緑色の笹と長方形に切った短冊をラウンジに持ち込んだ事から始まる。

「……何だ。これは」

「見れば分かるだろ。笹の葉と短冊だって」

「どこで貰ってきたんだ、こんなもの……」

呆れたように僕がそれを見つめると、近くの公園で小さな子供と遊んでいたら、その親がこれにくれた、と反ノ塚は続ける。恐らく今日が七月七日だからそれを渡したのだろう。

「……ってわけで、夜は屋上で七夕祭りな」

にっと口角を上げながら、僕の頭を撫でる反ノ塚に何も言えないままその背中を見送る。ラウンジには再び僕と隣で微笑みながら付き添っているSSの二人が残される。飄々とした笑みを浮かべているからか、彼の真意が中々読めないのが難点だ。

「君は参加するの？」

静寂の中に僕の声が響く。その問いにも彼は笑みを浮かべたまままだ。

「凜々蝶様が参加されるのであれば、僕も参加します」

「そ、そうか……」

会話が尽きてしまい、読んでいた文庫本の続きを読む事にし

た。けども中々集中出来ない。結局、その本を閉じて僕は彼にこう告げた。

「……やっぱり部屋に移動する」

「左様ですか。では、用事のある時に何なりと……」

「君も一緒に来てくれ」

そう告げると意外そうに目を見開き、その後嬉しそうに微笑む。

「分かりました」

それは、自分なりの甘えていいという合図であったりする。

部屋に着いた途端にぎゅうと抱きしめられる。いつもの事だからと慣れれば楽なのかもしれないが、生憎とそうはいかなくて。

何度か拒もうとしても、腰に腕を回されたらもう抵抗は出来ない。恋人同士になってからさらにスキンシップが多くなった気がする。

「ち、近い……っ！」

「ああ、やはり凜々蝶様は素敵なお方……」

すうっと自分の匂いを嗅ぐと、恍惚な笑みを浮かべる。腰を撫でる手つきもどこか厭らしいそれに、むっと顔をしかめると彼は苦い笑みを浮かべながら距離を取った。

「……すみません。調子に乗りました」

「あっ、いや。嫌な訳では無くてだな……その、は、恥ずかしくて」

言っている自分の方が恥ずかしくなり、顔に熱が集中する。見上げると視線が絡み合い、さらに羞恥心が増す。慌てて反らしても、顔に手を添えられて、彼の顔が近づく。

触れ合った唇。朝にコーヒーでも飲んだんだろうか、独特の苦みが触れた唇から伝わってきた。

「……んっ」

「凜々蝶様……口、開けてください」

彼の言葉通りに小さく唇を開けると、そこから彼の舌が侵入し、口内を蹂躪し始める。歯列をなぞられて、背筋にぞくりと悪寒が走った。

こんなに激しいキスをされると思っていなかった僕は既に脳内が混乱していた。覚悟を決めていなかったから、尚更に。それでも、不思議と嫌とは思わなかった。

「……ふはっ」

色気のない声を溢して、震える足を何とか支えようとする。今も御狐神君の腕で何とか立っていられる形だ。眉を潜めて彼を見つめると、彼の息も少し乱れていて、少し赤いその顔にどきっと胸が跳ねた。

「……凜々蝶様、もう我慢できません」

「え、」

横抱きされて運ばれたのは、寢室。彼の息遣いは未だに規則正しいそれではない。女が男にベットに組み敷かれると、想像する事は一つで。

全く想像すらしていなかったその展開に、とうとう僕の方が

持たなかったらしい。

「……凜々蝶様?!」

彼の声がどこか遠くに聞こえる。プツン、とパソコンの電源が突然切れるように、意識は途切れる。

僕はつくづく、こういう手には弱いんだなと遠くなる意識の中考えてしまった。

「……ちよ様。凜々蝶様」

「ん……」

目を覚ますとオレンジ色の夕日に目が眩んだ。それに気づいた御狐神君は慌ててカーテンを閉める。部屋の照明を点けて、お加減はいかがですかと問いかけられる。

大丈夫だと応えると、安堵した笑みを彼は浮かべた。

「……僕は、一体」

「あの後、意識を失ってしまったんです。まさか凜々蝶様に無理をさせていたのに気づかなかった僕の責任です」

しゅん、と何か反省した様なその顔に、胸が痛む。そんな表情をさせるつもりは無かった。

彼の銀色の髪をそっと触れる。俯く彼の瞳から一粒、二粒の雫が滴っていてぎよっと目を見張る。

「……泣かないでくれ。君のせいじゃないから」

「いえ。僕が凜々蝶様に無理強いしなければこんな事にはならなかったのです」

首を左右に振り、まるで戒めるかのように下唇を噛む姿に、

やはり彼は自分を大切にしようとしなない節がいくつか見受けられる気がした。

まだ知り合つて、数ヶ月。文通をしていた頃も加えれば長い付き合いになるかもしれないが、それを含んだとしても僕は彼の事を何も知らない。

恋人同士という友達よりも曖昧では無い関係であるのに、僕が彼を知っている事よりも、彼が僕を知っている事の方が多いだろう。それが悔しい。

もっと、知りたいのはきっと僕の方だ。知りたいと思うのなら、もっと素直にならなくてはならない。それは、分かっている。だけでも、それを邪魔するのが自分の性癖だ。

(——だとしても)

僕は決めたのだ。人と関わっていくことを。行動でも言葉でもいいから、伝えると決めた以上、今しないといけない事はそれなりに分かっているつもりだ。

距離を詰めて、彼を抱きしめる。背中に腕を回すと、彼は戸惑ったような顔をして、両手のやり場に困っていた。

「——時間が、欲しいんだ」

「凜々蝶様……」

「僕はもっと君が知りたい。実際のところ、君の事を僕はまだ何も知らないんだ。君の家の事、今の事、どれも知らない。もちろん心の準備が出来てないのもあるんだが……」

上手く言葉に出来なくて、言い淀んでしまう。そんな僕を悟ってくれたのか、御狐神君は両手を背中に回して、自分の方に

引き寄せた。

「……分かりました。凜々蝶様のお心の準備が整うまで、今日みたいな強引な事は致しません」

「……ありがとう」

彼の柔らかく微笑む顔が、愛しい。彼が、僕にとって大切な人であるから強くそう思えるのだろう。僕がもっと素直であるなら、この形容しがたい感情をしっかりと伝えられるのだろうか。(もっと知りたい)

君の事も知って、ありのままの君を受け入れるような人になれるように。それは御狐神君が努力する事ではなく僕が努力する事だ。まあ、初めてのデート以上に衝撃な事は無かったから、それは何とかかなりそうな気もするが。

「……そういえば、そろそろ始まってそうだな」

「お兄さんの仰っていた……七夕祭りですか？」

御狐神君の問いかけにこくりと頷く。誘われた以上、行きかけたその祭りに、御狐神君は理解してくれたのか、いつもの笑みを浮かべたままだ。

「……行ってもいいだろうか」

「断る理由がありませんよ、凜々蝶様」

ベットから起き上がり彼にエスコートされるように、僕は自室を出るのだった。

* * *

風に揺れる短冊。それを見上げる僕と御狐神君。濃紺の空を彩る長方形の紙達は、天の川に照らされている。晴天だからか、何とも幻想的な雰囲気は漂っていた。

反ノ塚はどうやら他の住人達にも声をかけたらしく、屋上に足を運ぶと全員に歓迎され、驚きを隠せなかった。短冊に願いを書き終わると各自で別行動となった。

賑やかだった祭りも、今となつては終わりを告げていて。静けさのみが二人の空間を支配する。そんな沈黙を先に破つたのは御狐神君の方だった。

「凜々蝶様は短冊にどんな願い事を書いたのですか？」

「それを言うとなんか叶わないと聞いたんだが」

「それは初詣の願い事に限つた事だと思ひますよ」

上手くかわしたと思つてたのに。そう心で悪態をついた所で彼にはお見通しなのだろう。ここで願い事を言うのは癪に障るので、秘密だと答えた。

「そういう君は何て書いたんだ？」

「僕みたいな犬が願ひ事なんておこがましいです」

「それでも書いたんじゃないのか？」

必死に食い下がると、御狐神君は案外あっさりとして教えてくれた。

「僕の願ひ事は、凜々蝶様と過ごすこんな日々がずっと続く事。それだけなんですよ、凜々様」

思わず、僕も同じことを書いたんだと告げてしまひそうになった。ずっと一緒になんて些細な願ひのはずなのに。二人にと

ってそれは傲慢すぎるのでは無いかと思つてしまふ位に、大きな願ひだったりする。

「——僕も一緒だよ」

「凜々蝶様？今何か……」

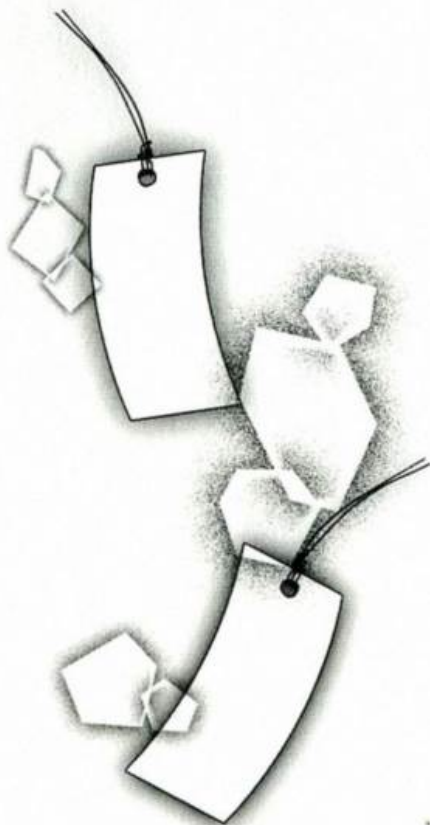
「な、何でもない！」

顔を合わせづらくなり、濃紺の空に輝く天の川を見つめる。都心でよくこんな綺麗に星達を見る事が出来るな、と心でひとりごつ。

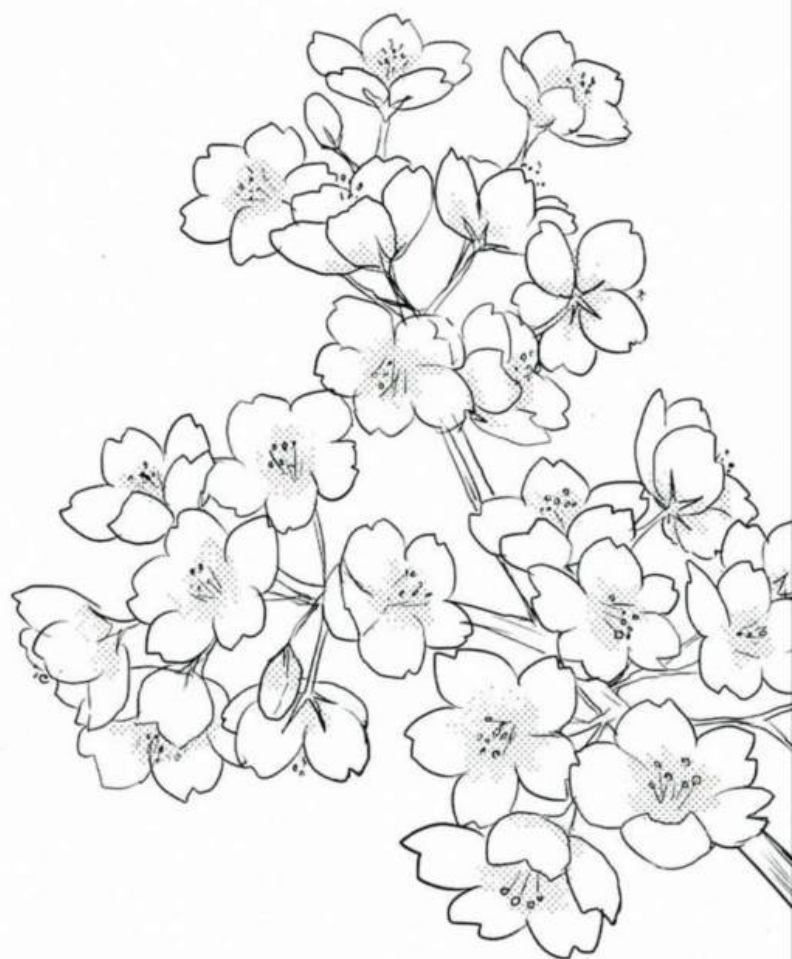
（僕と君は、一緒だよ）

何も言わずに、僕は御狐神君の手を握り締める。それに応えるように、彼は僕の手を握り返してくれるのだった。

(END)







BLANC X NOIR





これが君の
したいことなのか…?

まさかとは
思うが

……
御狐神くん



僕が言ったのは
こういう事じゃない

凜々蝶さまにしたい事は
沢山ありますが
今日はこれだけに
とどめておきました



はい

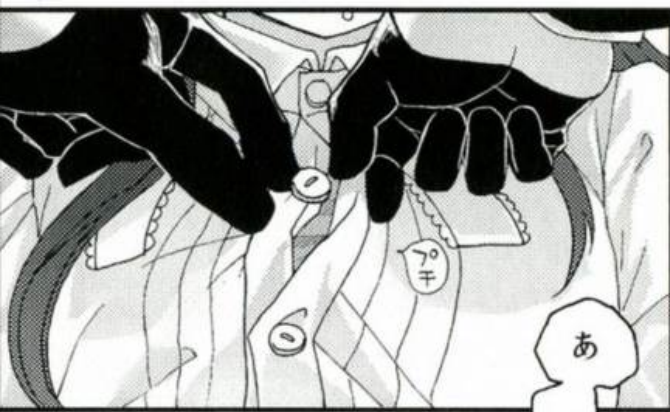


………
聞いてるのか!!!

なんだ僕「に」したい事って!!!
僕はもつとこう…御狐神くんの
行きたい所に行ったりとか…



もつと他に何か
無かったのかあああ!!!!





み
みけ...っ
あ♡

はあ♡
あ♡
み♡
あ♡
あ♡



あ...っ



あ、
はあ、
あ♡



する...っ



ふふ
それでしょうか?



御狐神くん...
何か...
これは

犯罪みたい
じゃないか...?

する...っ







申し訳御座いません
凜々蝶さま…
今外して
差し上げますね…



…壊れてしまう
かと思つた…



何故!?



いつそ壊して
しまいたいです…

え

いいですか?
凜々蝶さま…つ

いいわけな…

暗転。

…!!!



凍々蝶さま...

お許し下さい

駄目だ!!

調子に乗った
おしおきだ

しばらく
寝てる!!

...申し訳
御座いません...



少し
やりすぎたか...?

ち
ら



縛るだけで放置なんて
切なすぎます...

永遠に
そうしてろ!!

でもこれも凍々蝶さまから
与えられる苦痛だと思おうと
ずつとこうしていたい...

次の休みは
僕に付き合ってくれるか?

...でも
君の気持ちも
分かるかもな

は...はい♡

おしまい

風邪で変化が不安定になつてると!?

まっ

すみません私とした事が...
ですが凛々蝶さまのお世話を
お休みするわけには

二世

二世

バ、バカもの!
そんな事はいい
今日は安静にしてろ!

は...

姉×シヨタSS MIE

え〜と粥か?
あ、その前に葉か!?

ほ、僕は何をすればいい!?!
なんでも言いたまえ!
今日は僕が君の言う事
なんでも聞くぞ

カッ

では一つ

ととてもとても
お願いしたい事が
ございます...

しまった



とっても気持ちいいです…っ

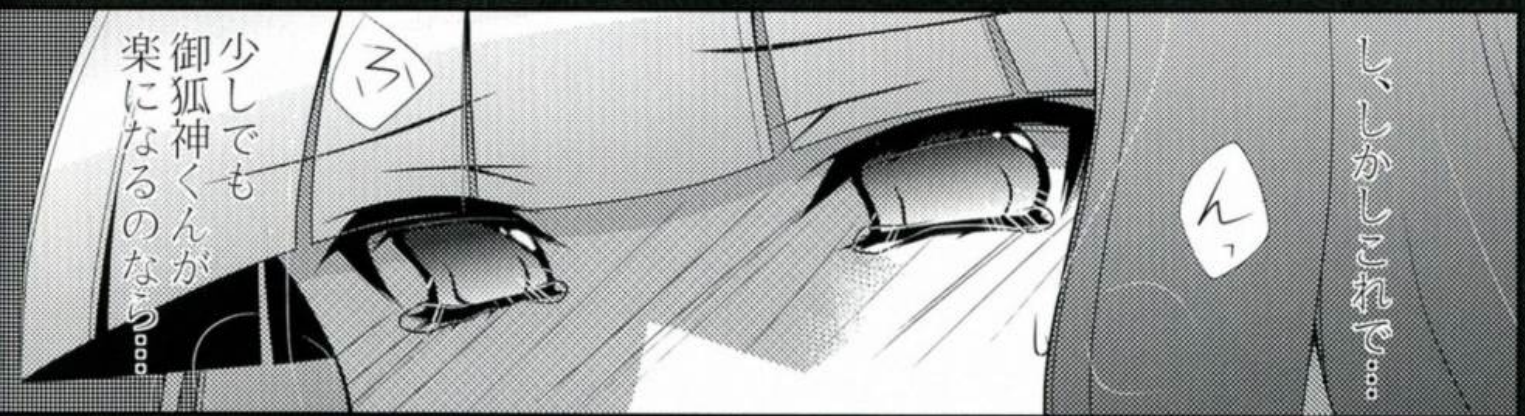
凛々蝶さま…



なんだか

凄く悪い事をしている気分だ…

ちゅぷ



…しかしこれで…

少しでも御狐神くんが楽になるのなら…



り、凛々蝶さまっ

んむっ!?

も、もう出そうです凛々蝶さま…っ

あああいきそうです！この私めのシヨタミルクいっぱい飲んで下さい





蕩けるほどに、愛して 愛麗朱

妖館の皆とタイムカプセルを埋め、御狐神くんと恋人同士になった日から数カ月が過ぎた。季節は凍てつく朔風が街を駆け抜けていく冬から、春風が頬を撫でつける頃合いへと移り変わった。告白した当日にキスをしてしまった僕達だったけれど、その後は恋愛どころか、人付き合い初心者の僕のペースに合わせてお付き合いが続いている。

長期休暇に入るに当たり、僕は御狐神くんを連れて実家へ帰省することにした。誰かを連れて帰省するなんて勿論初めてのことであり、彼のことは恋人として紹介するつもりでいる。幾ら希薄な家族関係とは言え、大切な人はきちんと紹介しておきたいのだ。悪態を吐いてばかりのこんな僕でも、『愛してる』と言って震える腕で抱き締めてくれた、大好きな人を。

◇◇◇◇◇

「只今戻りました」

母屋で暮らす生みの親に、形だけの挨拶を済ませる。素っ気無く頷くだけの彼等に向けて、正座をしてしっかりと向き合う。今まで感謝なんて微塵も感じたことなど無かったのに、恋をして、愛を知って、僕は初めて両親に感謝をすることが出来る様になった。

「父様、母様、聴いて下さい。彼は……御狐神くんは、僕の大切な

人です。僕が先祖返りだと解った時、さぞ複雑な気分だったことは察します。それでも……、僕を生んで育ててくれて有り難うございます」

深々とお辞儀をして頭を上げた僕が最初に見たものは、母様の目尻に浮かぶ光るものだった。彼女は優しく微笑むと、貴方が御狐神さんだったかしら、と隣りで頭を垂れる彼を見遣る。

「お初に御目に掛かります。凜々蝶さまのシークレットサービスしております、御狐神双熾と申します。……シークレットサービスとして失格であることは重々承知しておりますが、私は一人の男として彼女を愛しています」

御狐神くんの誠心誠意が込められた言葉に、母様が安堵の吐息を漏らした気がした。

◇◇◇◇◇

無事に挨拶を終え、離れの自室へと戻った僕と御狐神くんが最初に目にした光景は、ピツタリと敷かれた2組の布団だった。キスカら先は未知の世界の僕にとって、まさかこんな状況になるとは予想もしていなかった。それでも、彼となら……とも思う。

「凜々蝶さま……」

「み……っ」

まるで何もかも見透かしている様に、御狐神くんは少し深めのキスを一つくれた。二つの唇が離れると、視界一杯に大好きな人が広がり、鼓動が高鳴っていく感覚が心地良い。目の前の愛する人に触れたい、そう思えてさえるのだから不思議だ。だけど、彼は未だ僕に決して触れようとはしない。そういう雰囲気になっても何かを思い悩んでいる様な、切なそうな、苦しそうな表情を浮かべる時がある。こうしている、今この瞬間も。

「……………て？ どうして何もしてくれないの？ 僕は、君に触れた……んっ」

言葉を紡ぎ終える前に、御狐神くんの薄く形の良い唇が僕の唇を塞ぐ。全てを奪い尽くそうと暴れ回る舌に翻弄され、少し強引に歯列に割って入ってくる感覚に、背筋を甘い痺れが込み上げる。ようやく唇が離されれば、二人の間で銀糸が音もなく途切れ、伏せられた長い睫の下から覗く、青緑と金色の双眸と視線が絡み合う。

「凜々蝶さま……」

彼は普段より少し低く、掠れた声で僕の名を呟くとまた苦しそうな表情を見せる。確かな意思を持って伸ばされた手が、虚空を搔く。

「御狐神くん、そんな顔をしないで……。僕を、あげるから。全部、あげるから……」

次の瞬間、僕の身体を暖かな腕が優しく抱き締める。お互いの少し早い鼓動が重なり合い、同じ時を刻んでいく。

「凜々蝶さま、僕は……。僕の手は、身体は汚れています。それなのに貴女に触れたくて、抱いてしまいたくて仕方が無いのです。いけませんね、幸せだと欲が出てしまっ……」

泣き出しそうに俯いてしまった御狐神くんがたまらなく愛しくて、大切に僕は包み込む様にそっと抱き締める。

「大丈夫、汚れてなんていないから。生きる為、だったんだろう？ 僕はありのままの君を、御狐神くんを愛してる。だから……僕的全てを、貰ってくれないか？」

「凜々蝶さま……！ 僕も愛しています。世界中の誰よりも、何よりも貴女だけを……」

まるで硝子細工を扱う様に、そっと布団の上に押し倒される。間髪を入れずに彼が申し掛かってきて、紅く染まりきっているだろう

頬に、その大きな両手で触れられる。愛おしげに見下ろしてくる色
違いの瞳が、とても艶やかで。吐息さえも絡め取る様なキスで噛み
付かれて、首筋を彼の細く長い指で撫でられて僕の身体は敏感に震
える。

「……あつ」

堪えきれずに漏れ出てしまった声が、本当に自分の声なのかと耳
を疑いたくなる程に甘ったるくて、僕は慌てて口を塞ぐ。ただ恥ず
かしくて、恥ずかしくて必死に声を抑えていると、御狐神くんは今
まで聴いたことが無い恍惚とした声色で僕を甘く唆す。

「凜々蝶さま、声を我慢しないで下さい。僕にもっと、声を聴かせ
て下さい。僕に、悦い場所を教えて頂けませんか……」

少しずつ、少しずつ身に纏っているものを惜しみながら剥いでい
つて、僕は生まれたままの姿で彼の眼下に横たわる。身長も胸も控
えめな僕だけれど、御狐神くんは先程からずっと『綺麗です』『可愛
らしいです』と賞賛の嵐で、より一層恥ずかしい。けれど、同時に
とても幸せで。

「凜々蝶さま、本当に僕で宜しいのですね？ もし嫌なら、今直ぐ
に僕を跳ね除けて……」

嫌な訳無いじゃないか、僕が断れないのを知っているくせに。本
当に僕の恋人は何処までも強かだなと思いつつも、御狐神くんの言
葉に僕は静かに頷いて、甘える様に彼の首に自らの腕を絡める。そ
して少しだけ上体を起こし、唇がそっと触れ合うだけのまだ幼いキ
スを贈る。キスも、僕は御狐神くん、君と一緒に沢山練習して上達
していきたいんだ。そう願いを込めて、僕はこの世で一番大切な人
に微笑み掛ける。

「うん……。もし何時か生まれ変わっても、御狐神くんを覚えてい
たいんだ。もし忘れてしまっていたら、思い出したいんだ。此処は、
僕等の心と想いが生まれた場所だから……」

部屋の中を、弥生の朧月が淡く照らし出す。聴こえてくるのは僕
と御狐神くんの荒い息遣いと、淫靡な水音だけ。何もかも初めてな
僕を、彼は優しく丁寧に扱ってくれた。初めては痛いとはよく耳にす
るけれど、そんなことは無くて。初めての告白も、キスも、初めて
の行為も、みんなみんな御狐神くんが良かったと心の底から思える。
この先、もっと色々な初めてが僕を待ち受けているだろう。その一
つ一つを経験する時に、隣りで微笑んでいるのが彼だったらどんな
に嬉しく、楽しく、心強いのだろう。僕はそんなことを考えながら、
御狐神くんの腕の中で意識を手放した。

◇◇◇◇◇

「んっ……」

「お目覚めですか、凜々蝶さま？ 御身体は辛くありませんか？」

僕が微睡みから醒めると、直ぐ目の前には少し申し訳無さそうな表情をした愛しい人。まだ室内が暗いことから、そんなに長い間意識を手放していた訳では無いと知り安堵する。あちこちが痛いけれど、これは君と愛を確かめ合った証。

「なんとか大丈夫だ……」

精一杯そう答えると、御狐神くんは労わる様に優しく抱き締められて、僕は身を委ねる。彼の温もりも、匂いも、鼓動も全てが愛しい。

「凜々蝶さま」

「ん……？」

ふいに耳元で名を呼ばれて、顔を上げる。そこには、蕩けるほどに甘い表情を浮かべた御狐神くんが居て。

「御狐神くん」

「はい」

彼の耳元でこっそり愛を囁く。誰にも聞かれない様に気を付けながら、小さな声で『もっと好きになった』と。

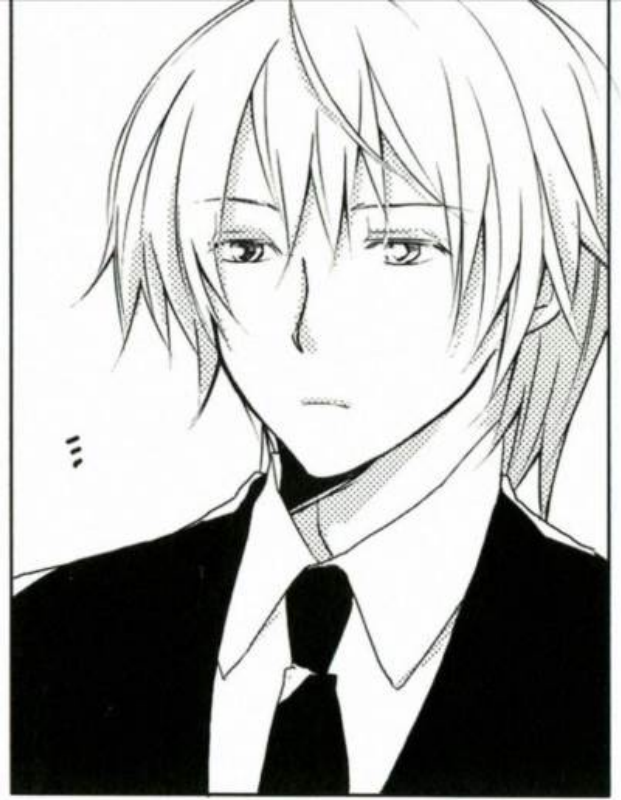
【完】



わたしにとって

凛々蝶さまは
光です





どうした?
御狐神くん...

!!?

恋人同士
でしようかねえ



あの...
真っ白の猫

まるで
御狐神くん
みたいだな

え?

少し甘えたがり
なところとか



かわいいな



もしそうなら

あれは
凛々蝶さまですね



そばにいと
安心する



やさしくて



あの黒猫も
わたしも

きみといると
安心するのかもな



だいすきです

だいすきです

だいすきです
凜々蝶さま



こえっ

心の声
がでてるぞ
御狐神くんっ

この
気持ちを
伝えられたら
いいのに

B B B





じゃなくて
お帰りなさい、
御狐神くん
待っていたぞ

この私がわざわざ
お帰りなどと…



ハダカ
エプロン →



ただいま
凜々蝶さま
待っててくださった
のですね



それともこのぼ…

…

くろっ



お風呂にする？

くろっ



食事にする？

…将来のためだ
がんばろう

くろっ



すい

せっかく食事も
風呂も用意したのに
...ひゃっ



もちろん
凛々蝶さまで♡



あっ♡
あっ♡

ちっ

おはは

スッ



みつけかみく...



んん

すい

↑「0」は「す」した



凛々蝶様の欲しいままに。
今夜は僕からも選択肢を出すので
選んでくださいいな？

将来のためだ
これくらい……！

よく濡れて
いますね



どろん

どろん

A 九尾でモフモフする

B 僕がリードされる側になる

C 同性で…
これも楽しそうですね

暗転。



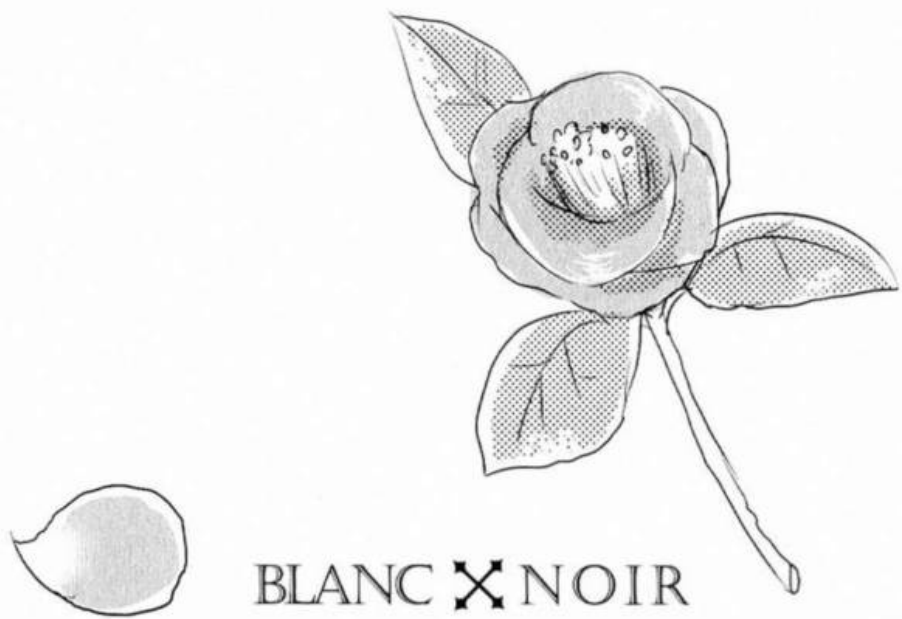
どうせなら分身で
4人同時に…なんて
興奮しますね♪



それから3日間、
僕は恩狐神くんと
口を聞かなかつた
のだった



おしまい。



BLANC X NOIR

MEMBERS' COMMENT

この度はアンソロにお邪魔させて頂き
ありがとうございました！
この先何があろうとも、
御狐神くんと凜々蝶さまが
2人で生きてれば
大丈夫、(*´▽`*)//

手前豆腐、普段はpixiv (ID→4155629) や
twitter (@soymilk_mg) や、
名前違うけどレイヤーとしてアーカイブ
(ID→243120) におります…！
どちらかでお会いできましたら
宜しく願いますー。



手前豆腐様

アンソロ発行おめでとうございます！
この度は参加させていただきありが
とうございました～！ 普段は別ジ
ヤナルなので、新鮮で楽しかったで
す。そしてこの二人が
わいい。二人がピュ
アすぎてえろになりま
せんでしたが、ワタ
しの思う二人の関係
を描けたらなと思い
ました。楽しんで
いただけると幸い
です///
コウ0000

<http://1st.geocities.jp/koudokoro/>



コウ0000様

素敵なアンソロジーに参加させて
下さって有難うございました

[https://www.pixiv.net/
member.php?id=48588](https://www.pixiv.net/member.php?id=48588)
にやめ



にやめ様

双ちよアンソロジー
発行おめでとうございます

素敵な企画に参加させて頂き
ありがとうございました！
沢山の双ちよが詰まった
一冊が出来るのが楽しみです！

清水紅葉/pixiv=4105823



清水紅葉様



MEMBERS' COMMENT



GULLIVER様

異能をもって退魔調伏せんとする妖人らに
幸あらん事を——

GULLIVER



愛麗朱様

初めまして、愛麗朱（ありす）と申します。
薄い本を出してみたいと思い始めて早5年。
今回、主催のElia様に御声を掛けて頂き
ようやく憧れを叶えることが出来ました。
この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

私の書くミケちよは百鬼夜行は完全にスルー、
DSでド変態で鬼畜な双嬢さん（賽め言葉）に優しい仕様、
凛々嬢さまの悪態が控えめです。凛々嬢さまだっって、
御狐神くんっていう彼氏がいる一人の女の子だと思うのです。
普段はPixiv (<http://www.pixiv.net/member.php?id=4294440>) で
活動しているので、もし宜しければコチラもどうぞ♪



紬様

紬 (tumugi)
pixiv:4321331
(*創作中心)

参加させていただき、
ありがとうございました。
主催のElia様、本当にお世話に
なりました。



はにちよこ様

お疲れ様でした！
皆さまの素晴らしい双嬢の中…
どうしようもない漫画を
投下してしまいました…汗
反省点しかないのですが、
これからもずっと双嬢を見守っ
ていきたいと思っております…どうか
二人に幸せな未来を…
<http://www.pixiv.net/member.php?id=4393253> ←ヒゲアゲもよろしくお願いします！

コーヒー
飲みませんか？

はに
5よこ



MEMBERS' COMMENT



冷や熱うどん様



忘却少女様



Elia (主催)



MIE (副主催)





◆奥付◆

BLANC X NOIR

(blanc et noir)

*Published on
17 March 2013*

*Edited by
Elia
Mie*

*Printed by
EIKOU Co., Ltd*

*website
<http://mono0526.holy.jp/lilium/>*

禁・無断転載/無断複製/オークションへの出品



◆執筆者一覧(敬称略)◆

ミィケ JUSTICE

清水紅葉 桜井桃香

ぱにちよこ 紬

忘却少女 うつぎゆあ

冷や熱うどん 手前豆腐

コウ0000 にやめ

GULLIVER MIE(副主催)

愛麗朱 Elia(主催)



BLANC X NOIR

INUBOKU SECRET SERVICE
SOUSHI X RIRICHIYO
UNOFFICIAL ANTHOROLOGY